

岡山・広島・岩国

俳句倶楽部

令和七年十一月作品集

母の里 松田裕子

いくつになっても、子供の頃の想い出は褪せることなく、心に残っています。両親が高齢をしていたので、私たち姉妹は、よく母の里に預けられました。街中に住んでいた私は、田舎の生活がとても楽しく、母を恋しがって泣く妹を慰めながら、後兄弟たちと日が暮れるまで遊んだものです。みんな高齢になりましたが、今でも後兄弟会をして、昔を懐かしんでいます。

つばくらめ出入り自由の農具小屋

縁側に並び西瓜の種飛ばす

ほうたるを両手に包み覗きたる

蚊帳のなか姉妹後兄弟の雑魚寝して

二階より身を乗り出して柿を握ぐ

健脚の祖父古木より柿落とす

節くれの祖母の手の剥く庭の柿

村の食堂どの机にも草の花

煙らせる祖父のキセルや秋の昼

法師蟬鳴くころ里を後にする

《作品鑑賞》

大畑 恵

幼い頃のお母さんのお里での思い出。とても楽しそうな様子が俳句から伺えます。面倒を見て下ったお爺さんとお婆さんの楽しそうで、とてもお元氣な姿も目に浮かびます。

西瓜、堂、柿、燕等々昔の田舎の様子が俳句の中にあり、私も自分の小さかった時の夏休みを思い出しました。

縁側に並び西瓜の種飛ばす

西瓜を食べながらみんなで一緒に種を飛ばし過ごす様子が楽しそうです。

ほうたるを両手に包み覗きたる

捕まえた堂を大切そうに手の中に持ち堂が光るのを覗いている子供達の様子がうかがえます。

健脚の祖父古木より柿落とす

お元氣なお爺さんが木に登り、下で柿の落ちてくるのを待っている子供たちが楽しそうです。ワイワイと賑やかに拾いあったのでしょうか。

法師蟬鳴くころ里を後にする

楽しく過ごした休みも終わり親の待つ家に帰る日、法師蟬の音がして淋しさを増しています。法師蟬がなく頃はもう初秋。時の立つのは早く季節の変わり目を子供ながらに感じている様子が伺え、祖父母との別れを淋しく思う気持ちが感じられます。楽しく遊んだ後兄弟の方達と今でもお付き合いが有るとのことうらやましく思います。

また一人日除を上ぐる湖西縁

白鷺の立つところ川合したる

秋風や内湖に舟のつながれて

秋の蝶風に流るる内湖かな

秋の夜に見えて琵琶湖の波寄する

コスモスのあたりで途絶え湖の音

宿出でてたちまち秋の風今津

家並が切れれば比良の秋の風

秋時雨遠き山から隠しけり

皇統をめぐる話や秋日濃し

佐保光俊

みづうみを色なき風の吹き渡る

比良の山照らして消ゆる秋夕焼

秋の宵静かに波の寄せて引き

星月夜湖の波音聞きながら

花芙蓉せせらぎ絶えぬ町に居て

朝の道けふ木犀の香りたり

川べりの紅葉黄葉を辿りけり

鴨来るいつもの川に四羽五羽

どの辺に浮いてくるかといつむり

波ひとつなき湖に鳩もぐる

高尾ひとみ

小流れに尾を浸しをり鬼やんま

書きかけの匂帳を開く夜長かな

庭に来るアサギマダラや秋深む

家の内に杖立て掛けて月を見る

島の上月美しき十三夜

脈測る手首見てゐる十三夜

なつかしき友より届く今年米

好物の富有柿を持ちやから来る

冬の川魚を啜へて奮の立つ

冬の月般若心経唱へけり

あざみ

運動会十八歳のアナウンス

電車待つ髪を揺らせる秋の風

公園の人を見てゐる秋日傘

秋草の匂ふ川べり歩きたる

芝居見に一駅歩く秋の雨

秋の蚊の目の前過ぎる昼餉かな

栗を煮るいくたびも鍋見にゆきて

川見つつ信子を待つ暮の秋

塾へ行く少年の影秋の暮

塾帰りの子とすれちがふ月夜かな

亜矢

爽籟に向かへる旅や一人して

金風へ踏み込む自転車へのダル

この路地のあちらこちらに金木犀

やんはりど諸手で受くる柘榴かな

菊の香の残る手のまま微睡みぬ

どの菊と選べずにいるる菊花展

菊日和けふ何色の花咲くか

月の秋野すこやか十五の子

亥の子餅買ふ囃子唄口ずさみ

十三夜因幡の友も見てをるらむ

綾乃

秋雨や淡海の浜をひた歩き

松原の石に座れる愁思かな

秋の湖今津を出てし航路かな

秋の日や静かに渡る舟廊下

弁天の島にからたち実を付けて

訪ぬれば鶯鳴き止まぬ崩れ薬

この犬と歩調を合はせ野路の秋

日の中へ朝顔一つ落ちにけり

爽やかに入日受けたる日浦山

閑やかに紅葉始まる日浦山

井藤希

朝顔の伸びて屋根まで届きけり

坂道のよりすがらを零れ萩

同僚と暮れゆく空の月眺む

谷川に零れ落ちたる山の栗

棟の実踏みしめて行く父母の墓

鹿声に母の寝床に潜り込み

茶の花に故郷のこと思ひけり

茶の花や友と遊びし山の畑

寒空の皇帝ダリア見上げをり

床の間の土佐寒蘭に日の差して

大畑恵

山間の晩稲の稲架へ朝日差す

風騒ぐ雑木紅葉の背戸の山

林檎熟れ村にあまねく夕日影

踏切のすぐ先寺の柿たわわ

馴れし手で母が栗剥く厨かな

切岸を跳ねて河原へ櫟の実

木の实落つ音に急かるる家路かな

鰯雲坂を下れば船泊り

巖島秋行く雲の高くあり

空と雲あくまで青く今朝の冬

暁子

秋暁の刻々変はる雲を見て

秋日影部屋の奥まで入りにけり

車からコスモス降ろし日の暮るる

夫の留守の来訪ベルや秋の昼

秋風に押されて歩くより坂

貰ひたる革葺と言ふ葺かな

十六夜の軒に掛かりて昇りけり

招待を受くる夫と吾敬老の日

川筋の桜紅葉を拾ふなり

城壕に桜紅葉のまた散つて

すみれ

鳥に揺れ風に揺れをり薄紅葉

黄葉の道はここより沢となり

黄落や一枚岩に日の差して

溪谷に秋夕焼の差しるたる

源流へ紅葉かつ散る道登る

日の当たる地層なぞりて秋の暮

近くよりオカリナ聞こえ秋の空

一人づつ増えて見上ぐる星月夜

橋渡り花終の香りかぐ

花石路を伝ひて出でし水辺かな

知佳子

風に揺るる夜顔今日も見て眠る

裏山で子ども黙々栗拾ひ

故郷に着くなり父の金木犀

月出でて靱摺の音続きをり

秋祭師に駆け寄りて手を握る

母曳きし子ども御輿を今は子が

渡櫓を夫はくるくる剥いてをり

夜神樂や寝た子を背負ひ帰る母

風邪引いて夫の運びし朝餉かな

窓越しに子の見舞客風邪籠

ちどり

青空に蜻蛉の翅の透けて見え

芙蓉咲く風の湖畔を歩きたり

石に乗る亀の甲羅の秋日かな

蕎麦茶から新蕎麦始まる昼餉かな

赤子抱き身を揺する人秋の暮

この町に少し馴染みて月の秋

病む夫の窓にも届け月煌々

長かりし二人の暮し今日の月

秋深し川に向かひて暮らしをり

空青し落葉の音を聞きながら

辻純江

場所の良き廊下に集ふ良夜かな

ポストへの道の明るさ月今宵

望の月我が影長く伸ばしたり

吊し柿朱の深まるを見つめけり

元氣かと秋の金魚を覗きみる

萱野行く頂はもう見えてをり

末枯を見上げてゐたる大通り

銀杏の撒きし如くに落ちてをり

電車にはコートの人をちらほらと

旅終へて蒲団に入る我が家かな

ヒット曲十位を聞いて冬の駅

爽やかに駅の花道行く選手

神の留守似たような子と逢う子と

チアリーダー高く上がつて秋祭

進化する光る羽衣目高かな

箱釣やこちらの網をみる店主

坂越えて古都の竹林秋深し

豆腐屋の引き戸を開ける冬近し

秋の町もともと確か映画館

干し柿のぶら下がりたる冷蔵庫

湯き水の流るるままに芙蓉揺れ

湯き水を引きたる家並み野紺菊

木道を渡りしところ赤まんま

木道より桜紅葉の下通る

色変へぬ松の浜辺をただ歩く

点々と木の舟浮いて鳩の声

雨の中鳩の潜るを見てをりぬ

実石榴の家に初老の人と猫

柴犬の大きな欠伸秋日和

幾度となく金木犀の庭を掃く

雲雀

ふじ女

松田裕子

霧流るる高速道を通院す

山茶花の寺に催す相談会

小春日や水栽培を始めたり

シャツの香やアイロン当てる夜の長し

晩秋の吾が影を踏み歩きたる

神棚の榊絶やさじ神の留守

寒昴歌姫の声澄んでをり

綿虫を侍らす皇帝ダリアかな

冬の蠅払へる母の声元氣

セーターのネックを伸ばし口覆ふ

村上正人

ビー玉を透かして仰ぐ秋の空

栽培を褒めて教はり杜鵑草

参拝に禰宜の犬吠え秋の昼

一村のにはかに翳る秋入日

秋の湖船に伊吹と比叡見て

浮き上がる位置を目で追ひ鳩

鳴く鶯の塀近きか崩れ縋

蘆は枯れ川は琵琶湖に混じりけり

周航の歌に宴用づ秋の夜

服薬に替はる散歩や冬隣

森口良樹

沢蟹のじつとしてゐる石の上

蟪蛄の餌を食みけり木道に

それぞれに秋風の吹く立ち話

街の灯の車窓に流れ秋の暮

石ひとつループで覗く秋の夜

捨て切れぬ本を眺むる秋の夜

近寄れば風吹いて来る山葡萄

下り来て鐘の音する七竈

甘き香にふと立ち止まる熟柿かな

秋楡

秋光の鬼ノ城見上げ匂会へと

秋澄むやボストへ落す文の音

櫓の実を仰げば空の蒼さかな

蘆の穂や釣り人のゆく沈下橋

百舌鳥鳴くや大山道に沿ふ家並

裏庭に鴉の落す柿の音

風切れば新藁の香やべダル踏む

影長きベンチの二人黄葉舞ふ

破蓮やとんとん渡る太鼓橋

A-1に悩み相談雨の月

駅前のおきホテルや渡り鳥

専門書棚よりあふれ秋深し

パレードのフロート進み冬隣

退職は年度途中や紅葉散る

冬めいて棚に積みたるカップ麺

冬晴の職場藍の実収穫す

クリスマス贈る袍を探索す

寒椿新婦の髪を結い直し

鳥の声近くなりけり秋の朝

稽古前道場抜くる秋の風

秋燕群れて動くや空高く

秋の川日の出の位置の移ろひて

久しぶり無心にピアノ弾く夜長

たわわなる柿の歳本夕の道

今日もまた柿に群がる鳥の声

ふるさとの祭を思ふ金木犀

素振り終へオリオンの動きに氣付きけり

今井淳子

竹田千紘

をっ

群はなれ一匹葉末赤とんぼ

同窓の物語者の名や水澄めり

緩やかな坂を駆け出し紅葉

貨車過ぎてホームへ流れ草の絮

再会の友の笑顔や秋深し

山肌に日差しの残る秋の暮

すくも振る農夫へ冬日差してをり

果樹園の収穫終り冬の星

リード引き渡る歩道や神意月

山野ウタ

蝶となり眺めてみたき淡海よ

今年また眺むる山や秋涼し

てのひらに動き出しさう団栗は

秋の星小さき町の窓に見る

格子戸を開くれば湖よ秋の日よ

秋の雨頬も匂帳も濡らしけり

デジタルの点滅見詰め秋思かな

神隠しに逢ひさうな風紅葉狩

土肥律子

墓参り精霊蟋蟀付け帰る

この道譲ってくれし白鶺鴒

秋空の飛行機雲を指で追ふ

分かれたる枝に揺蕩ふ紅葉かな

黄昏の荻の穂波の寄せてくる

冬晴の沖へ流るる弾き語り

夜の明けて白湯ひと口の寒さかな

日を受けて湯気の立ちたる冬の川

松本卓士

裏庭にコスモスの花咲きにけり

芸備線窓から見ゆる秋景色

栗ご飯炊いて隣へ差し上げる

宮島の紅葉並木を散歩する

元氣かと父より景書冬の朝

立ち止まり彼岸桜を見上げたる

満員のバスより見ゆる後の月

古刹へと鞘橋わたり照紅葉

犬連れて行きつ戻りつ紅葉狩

ゆつくりと落葉を踏んで友の来る

友もまた白髪まじりや冬薔薇

小春日やおしやべりつつ波止場まで

秋の日の瀬戸の島々友と行く

山茶花のひとつふたと咲き始む

佗助の一輪咲いて日の昇る

冬薔薇石灯籠の傍に咲く

冬の朝田に舞ひ降るる二羽の鷺

瀬戸の海冬日沈めば茜色

河原静子

撫子

美耶

コンサート終へて駅へと落葉踏む

ジョギングを追ふ自転車や冬の虹

見晴るかす尾道水道冬うらら

真つ直ぐに銀杏黄葉を通り抜け

枝詰める冬芽二つを残しつつ

大原良子

宮島をそぞろ歩いて冬紅葉

水鳥の薄暮の川に三羽来る

煙突の煙の高く冬夕焼

冬の鳥けふは群れずに佇みて

閑運の色で選んで日記買ふ

上島康子

明日香村枝しならせて柿たわわ

太子堂出れば芙蓉の白さかな

音もなく近寄る鹿や秋時雨

角切らぬ鹿に日暮れの小雨かな

コンビニで朝の珈琲冬初め

熊谷ゆり子

帰る子を乗せたる電車霧の中

降り立ちて時雨過ぐるを待つ駅舎

朝露に鴨の声聞く里の川

裏木戸に八つ手の花や武家屋敷

一人居に人恋しきは冬の宵

前田範子

満天星の濃きも薄きも紅葉かな

そこにだけ朝日の届く冬紅葉

傘杖にやうやく歩く霜月や

雪解けの湯気の立ちをる田んぼかな

紀英子

風に鳴る破蓮の田に立つてをり

触れ合うて青立ててゐる破蓮

蓮の実に日の影のなく直立す

破蓮の向うに人の見えてをり

桑門わかこ

車椅子で検査めぐり秋時雨

お元氣と人達ひされ柿売場

干し柿を六個吊るして七日程ち

雨上り濡れ落景避け遊歩道

桜陽

秋日和竿いつばいに物を干し

流感の予防接種の予約せり

ベランダに客と自分の蒲団干す

音すこし大きく冬のドラマ見る

みさ子

オレンジに鰯雲染め日の沈む

立ち並ぶ公孫樹並木に実を探す

吹く風に向かひて飛びぬ雪虫や

上條忠

二次会を抜けたる帰路の後の月

懐の風のゆるさや冬浅し

夕日背に前は棚田のしぐれをり

志路 猿

ふと訪ね来し子の膳に秋茗荷

明日帰るてふ子に香る銀木犀

母植ゑし真白き菊の乱れ咲く

高嶋 絹代

大花野行き交ふ人は二人連れ

芋の露ゆらゆらゆらし登校子

秋の潮うねり大きく着岸す

高梨 英子

秋風や路傍の石に腰下ろし

強き風桜紅葉を散らしけり

吊り革を握る手どれも手袋し

民

秋うらら帰るなど出す小さき手

片手つつピアノを弾いて夜半の秋

山形の根元の見ゆる時雨虹

山崎桂子

エジプトの遺跡に吹いて秋の風

コーヒーの香り嗅ぎたる秋の昼

ドジャースを日々応援し秋深む

弥生

コスモスに手をふれてみる般若寺

白菜を二つに割いて縁に干す

姑の塩振つてゐる広島菜

和田史子

部屋中に着物を広げ冬支度

ざわざわと掃けども掃けども落葉舞ふ

古川廣子

令和七年十月度作品集より

大畑 恵 私の選んだ十句

とんぼうを白き雲まで見上げけり
吾が袖のふれて白萩散りにけり
月光の降りそそぎけり曼珠沙華
かなかなの道をゆつくり帰りけり
野紺菊無口なままの古稀の友
麻酔覚め秋の日差に夫の顔
秋深む寝息に絞るテレビ音
鈍行の 膝に 栗飯 一人旅
朝稽古名残の蟬の声を聞き
山茶花の咲き満ちてゐる留守の家

佐保 光俊
高尾 ひとみ
綾 乃
井 藤 希
知 佳 子
松田 裕子
森 口 良樹
今 井 淳子
な つ
紀 英 子

松田裕子 私の選んだ十句

とんぼうを白き雲まで見上げけり
草の絮ひとつが吾の前をゆく
息をせり最後の栗を剥き終へて
木犀の障子を越えて香りたり
木犀の匂ふあの筋この筋に
秋茜群れて高さの揃ひたり
冬の街ウインドウのマツチ売り
秋深む寝息に絞るテレビ音
今日散れば明日は新たな芙蓉かな
木犀の香や西風の雨模様

佐保 光俊
高尾 ひとみ
亜 矢
大畑 恵
暁 子
辻 純 江
ふ じ 女
森 口 良樹
美 耶
志 路 猿